

# リスニング活動を重視した英文理解教育

竹内春樹\*

## How to Teach English Texts through Listening Activities

Haruki TAKEUCHI

**Abstract:** In order to improve learners' listening competence, information communicative teaching was adopted. The characteristic of the method is to let learners engage in activities which focus on the transmission of information. In this paper, the procedures are introduced, and the learners' responses are analyzed. As to the utility of the method, their responses were generally positive. In Japan, the acquisition of language through reading seems to be normal, but it is also true that we acquire language through listening. In this method, learners are exposed to English sounds first and later to the written text. This order of presenting the text will have possible effectiveness. As another merit, this method is rather easy for Japanese teachers to adopt in their classes, because special techniques are not required even for the teachers who are accustomed to grammar-translation methods and because this method is effective in large classes.

**Keywords :** listening competence, information communicative teaching, current English

### 1. はじめに

前年度に行った学生に対する調査では、リスニング能力の改善を希望するものが多かった。そのため今年度は、通常の授業に加え、リスニング活動重視の時事的長文理解教育を行っている。今回の発表では、授業方法を説明するとともに、その教育に対する学生のアンケート結果を分析し、リスニング活動への認識とこの授業法の効果を検証する。学校教育では、従来リーディング活動、文法指導、単語学習が中心になっていた傾向がある。それに対して、学習者が本来持っているリスニング能力の活性化を目指すのが、本研究の目的である。1年生から4年生を対象にして、この活動を、通常の教材を使用した授業に加えて行っている。2年から4年では通常の授業では英会話の教科書を使用している。当然そこにはリスニング問題が含まれているが、社会的に円滑なインターアクションを基本としており、時事的内容に関して、情報を聞き取るというものではない。それ故、本研究で究明されることは、いわゆる英会話ではない内容、つまり長文についてのリスニング活動

の在り方に対する提案となっている。

### 2. インフォメーション・コミュニカティブ・ティーチング

本研究の教授法理論として、インフォメーション・コミュニカティブ・ティーチングが挙げられる。Cook (2001: p.218) によれば、この教授法の特徴は、参加者間の社会的相互活動よりも伝達される情報を強調することにある。また最初にリスニング活動を行う教授法は、学習者にリスニング活動に従事することを要求するが、文章を生み出す準備ができるまで、文章作成についての活動は要求しない。また、情報の理解は、それ自体目的ではなく、言語をより完全に使いこなすようになる1方法である。

Cook (2001: p.219) はさらに次のように述べている。この教授法の利点はどのようなクラスサイズにも役立つことである。それ故に、ソーシャル・コミュニカティブ・スタイルよりも、伝統的な教師が中心の教授法と一致点がある。学生が人前で話すことよりも、リスニング活動に従事することを気にしなければ、より広範囲の学生に向いていることになる。さらに、リスニングの内容として、架空の話よりも、現実の話題を扱ったものを使用することを薦めている。学生が、そうでなければ知ることができなかった

\*近畿大学工業高等専門学校

総合システム工学科 共通教育

ことを知るようになるからである。

### 3. 教育実践

#### 3. 1 教材

教材については、毎日ウィークリーの記事および音声をインターネットよりダウンロードして使用している。資料1に使用した記事を掲載しておく。時事的な内容なので、学生は少しでも content schema を持っていることと思われる。たとえ単語が難しい場合でも、とっつきやすいと感じられる。

#### 3. 2 受講学生

受講学生は、1年生20名、2年34名、3年17名、4年30名、計101名である。それぞれ各学年の英語1クラスを対象としている。平常授業では、1年生は、文科省の検定済み英語I教科書及び文法問題集で学習している。2年生は英会話教科書と文法問題集、3年生も英会話教科書を使用している。4年生も英会話教科書を使用している。2年から4年までの英会話教科書には、リスニングセクションがあるが、対話形式で、時事的な内容ではないため、今回実践したような時事的英文の聞き取りは意義のあることと思われる。

#### 3. 3 授業方法

授業手順は、まずテキストのCDを2回学生に聞かせ、テーマ把握と特定項目の理解を英語の質疑応答で図った。この段階では、まだプリントを配布しないで、学生はリスニングに集中する態勢をとった。Brown (2001: pp. 260-264) にボトムアップあるいはトップダウンからのリスニング指導法が掲載されており、参考にした。資料1の教材を使った時の、実際の発話は、次のようなものであった。

“What is the topic of the story?”

“How old was he, when he became a professional sumo wrestler?”

“How many languages can he speak?”

“What sport did he practice at the age of 16?”

“Why did he choose this career?”

学生の反応であるが、クラスにもよるが、活発な反応が見られた。資料1以外のリスニング教材を用いた時、かなり聞き取りが難しい問いに対しても、答える学生がいた。また、リスニングでの理解が得意な学生が、リーディングや文法学習が得意な学生とかなり違うという現象も見られた。

次に資料1のテキストを配布し、CDを2回かけて、空所の聞き取りを行なわせた。この際、英語のスペルについ

ては、未習語の可能性もあるので、学生にはこれはスペルの正しさを競うものではなく、耳で聞いた音をローマ字で表せばいいと説明した。実際、答合わせを行う際には、学生にその音を言わせ、私の方で、正しい綴りを黒板に書いた。また小テストとして、空所に書き取らせる試みも行っているが、その場合でもスペルが音を適切に表していれば、合格としている。音を聞き取ることと、正しい綴りが書けることは違うという考えに基づく。そしてその後、単語説明、各文の説明を行なった。

リスニングテストのあり方について、Buck (2001: pp. 125-126) は、「もしも反応が理解可能ではっきりしたものであれば、ミスに対してペナルティを課さない方が理にかなっているようだ。結局、私たちは、テスト受験者がテキストを理解したかどうかを知りたいのであって、正しい言語を生み出せるかどうかを知りたいのではない」と述べている。学生が反応した後に、正しいスペルを教えるという手順で、正しい言語習得がなされると思われる。

#### 3. 4 アンケート結果

このような授業を行った後で、受講者に対して、アンケート調査を行った。資料2にある項目について、三つの選択肢から、一つを選ばせた。項目番号1と2については、「リスニング」「リーディング」「どちらともいえない」の選択肢から選ばせる形式である。項目番号3から10については、「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の選択肢から選ぶことになっている。

項目1で、リスニングとリーディングとどちらができた方がいいか尋ねたところ、リスニングができるようになりたいという学生が、10%以上多かった。やはり、英語を聞きとることへの願望が強く現れていた。

次に、リスニングとリーディングとどちらが易しいか尋ねたところ、リーディングが易しいという学生が多かった。その差は50%以上にもなった。リーディングの場合は、目に見える確かなもの、時間をおいても、そのままそこにあるものという認識に対し、リスニングでは、音声は瞬間に消えてゆくものという理解だろう。また文の、あるいは単語の切れ目がわからないということも、この認識の背景になっていると思われる。

英語のCDを聴くのが好きかどうか尋ねたところ、どちらとも言えないと答えた学生が39%で一番多かった。次いで、「いいえ」が35%、「はい」が26%という結果だった。リスニングができる学生になりたいという願望は強くても、CDを聞くことにはイコールでつながっていない状態が示されている。だからこそ授業でのリスニング活動が意味を持つように感じられる。

時事英語を聴くことが役立つかどうか尋ねたところ、役

立つと答えた学生の方が多かった。67%で、「いいえ」の11%をかなり上回った。時事英語に触れるのが初めてという学生も多かったと思うが、反応は良好であった。

リスニング内容に関して、英語でテーマ把握をすることが役立つかどうか尋ねたところ、役立つと答えた学生の方が多かった。肯定的なものが60%で、否定的なものが9%と、圧倒的に肯定する者の割合が多かった。次の問い、リスニング内容に関して、細部を英語で聞くことが役立つかどうかについても、ほぼ同じような傾向が見られた。

リスニング活動で、( ) 内に入る単語を聴きとる活動が役立つかどうか尋ねたところ、肯定が48%で、否定が15%であった。リスニング活動で、( ) 内に入る単語を聴きとることが易しいかどうか尋ねたところ、そうは思わないと答えた学生がかなり多かった。優しいが18%で、難しいが60%に達した。

リスニング活動及び英文説明は、単語を増やすのに役立つかどうか尋ねたところ、役立つと思うと答えた学生が多かった。肯定的な者が、54%で、否定的な者が、19%であった。

#### 4. 考察

この授業の利点は、リスニング内容が現実社会の出来事であり、英語自体の勉強になるだけでなく、学習者に科学、経済、政治、文化、スポーツといった分野を学習できるものとなっていることが挙げられる。もちろん平常授業での、対話文のリスニングでは、生活に密着した聴き取り能力を身に着けることができるので、どちらがいいとか、劣っているとかいうことはできない。したがって、教養的かつ現実社会を映し出している内容のあるリスニングと生活に密着したインターアクション重視の内容に関するリスニングでは補完関係があると言えるだろう。

このインフォメーション・コミュニケーション・ティーチングを導入するにあたって、ポイントの一つは、音声を聞かせる際に、トランスクリプションを見せないことである。もしも学生が、先にそれを見たら、音声を聞くことの意義がかなり奪われることになる。トランスクリプションを見せるのは、リスニング活動終了後のテキスト説明の際にすべきことである。この手順を守ることで、学生はリスニングに集中し、一定の理解をすることで、リスニングの可能性を信じるようになると思われる。リーディング重視の授業を受けてきた学生は、書かれた文章を信じて、聞いたことに対しては自信がない状態なので、リスニングで発話内容が理解できるようになるということを認識する必要がある。

もう一つのポイントとしては、事前にヒントを与えすぎないことが挙げられる。ヒントを与えることは、スキーマ

の活性化につながるのだが、これも多すぎるとあまり音声を聞かなくてもいいことになってしまう。音声を聞くことで、初めて内容を知るぐらいが本当はいいのかもしれない。学生の英語力、そして音声材料の難易度によって、ヒントの量が決められるだろう。しかし、やはりこれもなるべく少なくする方が、リスニング能力の改善につながると思われる。リスニングの負荷は可能な限り大きい方が、効果が大きいと考えられる。

しかし、一方で、その負荷が大きすぎても学生に自信を無くさせるかもしれない。このような状態を防ぐために、有効と思われるのが、空所補充にしても、内容に関する英問英答にしても、その答の部分でCDを一度止める方策である。例えば数字の書き取りで、文章がどんどんと読まれる状態で、書き留めることは易しいことであろうか。選択式の問題なら、答えることは易しいかもしれないが、記述せよと言われた場合は、かなりの困難が生じる。それゆえ、CDを一時的に止めて、書き留める時間を与えることは、必要と思われる。また英文が難しく、未習の単語が多い場合、学習者に時間的にゆとりを持たせる、あるいは答の部分へのヒントを与えるといった点からも、有効な手段と思われる。このような聞き取り上の配慮は、音声テキストの語彙、構文の難しさ、発話速度、設問の難しさなどによって決定されるべきで、常に一律の配慮をすべきというわけではもちろんない。学習者がある程度の自信で答えられる、そのような状況を生み出すことが望ましい。

学生に配布したプリントの中で、空所に入る単語を書き取らせることは、時として難しい活動であろう。学生の意見としては、音声はつながっており、どこで切れ目があるのか、判りづらいということであった。これは至極もったもな意見といえよう。Fromkin, Rodman, Hyams (2003: p. 232)は、この件について言及している。また彼らは、英語のつづりと発音の関係における困難さについても触れている (Fromkin, Rodman, Hyams, 2003: p. 237)。この点については、Harmer (2001: p. 31)によれば、例えば同じ母音/ʌ/が、won, young, funny, floodと違ったつづりで表されると記述している。学生が正確なつづりを書けなくても、なんら不思議はないであろう。もちろん、だからそれでいいというのではない。ただ聴き取りのスペリングと英作文におけるそれとは、区別して指導すべきという意見である。

この空所に対する聴き取りの作業に関して、注目すべき点は、学生が構文を考えて品詞を使い分けて答えているかどうかの問題である。形容詞を入れるべきところに名詞を入れたり、動詞の形を現在分詞で書くべきところを原形で表す点である。これらは学生の文法理解にかかわる点であり、教師による適切な指摘により、リスニング活動が、学

生の文法習得に寄与することになる。Fromkin、Rodman、Hyams(2003: p. 403)には、私たちが発話を聞き取る時、parsing と呼ばれる活動を行っている」と記述している。リスニング活動では、このようにして、品詞を確認しながら、文法の構成要素の観点から文を分析する能力を育成することができる。

この研究で用いた音声材料は、発話速度、内容、文法、単語といった点で真正な言語とみなされるだろう。Harmer(2001: p. 205)は、この点についての重要性について、「目標とする言語と学習者が会うなら、これこそが(真正な通常の自然な言語のこと)、現実に遭遇するものである、そして真正なゆえに、単純化されたり、ゆっくり話されたりする内容のものではない」と述べている。リスニング教材が、すべて真正であるべきとは思わないが、できることなら真正な言語材料を提供するのが、学習者に多大な利点を提供する正しい教授法といえるだろう。

## 5. まとめ

時事的英文をリスニング活動を通して理解するという授業について述べた。言語を受け取る方法として、リーディングとリスニングがあるが、従来あるいは今日でもリーディング活動が圧倒的に授業の中心であると思う。確かに、文字という目に見える言語手段は、時間がたっても変化しない存在で、安心感を与えるものであるが、言語の本質を考える時、もっと授業でリスニングを取り入れるべきであろう。たとえ書かれたテキストを提供する場合でも、まずその文章を見ないで、リスニング活動をさせることが、有用と思われる。インフォメーション・コミュニケーション・ティーチングという教授法の視点から、授業を展開することは、多くの学生を一度に教える日本での教育に合っているのではないか。また教師の側から言っても、なじみやすい教授法といえるのではないか。

実施方法についてのポイントとして、次の3点を挙げておく。まず、上にも書いたように、トランスクリプションを学生に見せずに聞き取りをさせる点である。トランスクリプションを見せた段階で、本来のリスニング活動が行われないからである。このテキストを見せないというのが、1番目の主張である。また聞き取り上のヒントもなるべく少ないほうがよいと主張した。ヒントが多ければ多いほど、学生がリスニング活動を行う意義が失われてゆく。必要最小限にすべきというのが、2番目の主張である。対話形式の会話文では、時事的なリスニング教材よりも易しい傾向があると思う。対話形式のリスニングを行う時よりも、この研究で用いた情報理解中心のリスニングでは、学習者に配慮を示した活動をすべきであろう。学習者が、リスニング活動に興味を示すように、CD をかけるときに適切に CD

を一時的に止めるといったようなことが必要である。また英問英答といった場合は設問を答えやすいようにする必要もある。この配慮を示すということが3番目の主張である。高等専門学校の学生に対しては、ある程度難しい英文の聞き取りを目指すことになるだろうが、教員の適切な配慮で、学生は前向きにリスニング活動に取り組んでゆくものと期待される。

## 参考文献

- Brown, H. (2001) *Teaching by Principles*. New York: Pearson Education.
- Buck, G. (2001) *Assessing Listening*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cook, V. (2001) *Second Language Learning and Language Teaching*. London: Arnold.
- Fromkin, V., Rodman, R. and Hyams, N. (2003) *An Introduction to Language*. Massachusetts: Heinle.
- Harmer, J. (2001) *The Practice of English Language Teaching*. Harlow: Pearson Education
- Nunan, D. (1988) *The Learner-Centred Curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press.

資料 1 授業で使用したテキストの例

Popular Promotion

"It hasn't sunk in yet," said Estonian sumo wrestler Baruto, 25, referring to his promotion to ozeki, the second-highest rank for professional sumo wrestlers.

Baruto was given the title on March 31, the first wrestler to ( ) the rank since November 2008. He is also the eighth foreigner to attain ozeki and the second one from Europe, after the Bulgarian Kotooshu. "I will ( ) myself fully and endeavor not to taint this honored status," he said during a conference in Osaka ( ) by the Japan Sumo Association (JSA).

JSA director Mukogawa said, "I would like him to set an example for all sumo wrestlers, including in his private life."

( ) in Estonia, Baruto, whose real name is Kaido Hoovelson, ( ) his debut as a professional sumo wrestler at the age of 19. His unique and friendly character has made him popular among his wrestling colleagues. In addition to Japanese, Baruto, who ( ) a Russian last year, is fluent in Russian and German.

When he was 16, Baruto started practicing judo in Estonia and became a national junior champion; however, after his father passed away around the same time, he had to start working as a bar bouncer to earn a living.

"I ( ) danger many times," he says.

Baruto's life ( ) drastically when he shifted from judo to sumo. He gained a second-place finish in the European junior sumo championships. As a result, he was recruited to become an amateur sumo wrestler in Japan. During the summer tournament in 2004, he made his debut as professional sumo wrestler Baruto.

( ) why he chose this career, Baruto replied to reporters, "Sumo is beautiful."

He ( ) concerns over the future, saying: "I want to contribute to reviving the popularity of sumo, and I want more children to like it."

(Mainichi Weekly)

popular 評判がよい (後出 make ~ popular は~を人気 [者] にする) promotion 昇進 sink (→ sunk) in (ここでは) 実感がわく Estonian エストニア人の (後出 Estonia はエストニア) gain 獲得する (後出 attain も同意) devote oneself 精進する endeavor 努める taint 汚す honored status 荣誉ある地位 conference (ここでは) 伝達式 Japan Sumo Association (JSA) 日本相撲協会 director 理事長 set an example 手本を示す colleague 同僚、仲間 (be) fluent in ~ ~語に堪能である pass away 亡くなる bar bouncer バーの用心棒 earn a living 生活費を稼ぐ (be) recruited スカウトされる express concerns 懸念を表明する contribute to ~ ~に貢献する revive the popularity of ~ ~の人気を取り戻す

出典 : <http://mainichi-podcasting.cocolog-nifty.com/weekly/>

資料2 アンケート結果 1年から4年の合計

項目		「リスニング」または「はい」		「リーディング」または「いいえ」		どちらともいえない		回答数
		人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	
1	リスニングとリーディングのどちらができたらいと思いますか	42	42%	29	29%	30	30%	101
2	リスニングとリーディングのどちらがやさしいと思いますか	12	12%	66	65%	23	23%	101
3	英語のCDを聴くのは好きですか	26	26%	35	35%	39	39%	100
4	リスニング活動で時事英語を聞くことは役立つと思いますか	66	67%	11	11%	21	21%	98
5	リスニング内容に関して英語でテーマ把握をすることは役立つと思いますか	61	60%	9	9%	31	31%	101
6	リスニング内容に関して細部を英語で質疑応答することは役立つと思いますか	61	60%	13	13%	27	27%	101
7	リスニング活動で（ ）内に入る単語を聞き取ることは役立ちますか	48	48%	15	15%	38	38%	101
8	リスニング活動で（ ）内に入る単語を聞き取ることはやさしいですか	18	18%	60	60%	22	22%	100
9	リスニング活動及びその英文説明は、単語を増やすのに役立つと思いますか	55	54%	19	19%	27	27%	101